

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。

久保山愛吉
記念誌



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース **No. 9 4**

2009(平成21)年3月1日(日)発行

<55年前の1954(昭和29)年3月1日は、「第五福竜丸事件」の日。9月には久保山愛吉さんが死去>

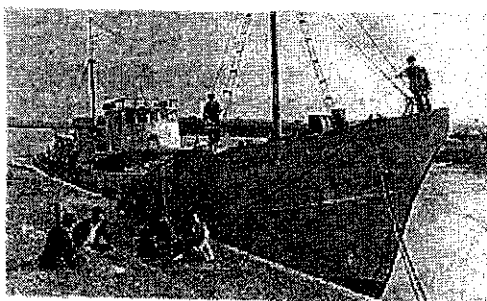
●1954年3月1日、アメリカは太平洋のビキニ環礁で水爆実験を行います。静岡県焼津港所属のマグロ漁船「第五福竜丸」は、太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁の東方160度の危険水域外で操業中でしたが、一瞬、南西の水平線に「西に昇る太陽」の閃光を見て、7・8分後に爆発音を聞き、約3時間後に放射能を含む白い「死の灰」を船上一面にかぶった。●「第五福竜丸」は3月14日焼津港に帰港。読売新聞が16日朝刊で「原爆実験か」とスクープ。国際的な問題に拡大した。乗組員23名全員が被曝し、9月23日に無線長の久保山愛吉さんが放射能症で死去。●アメリカは「第五福竜丸」をスパイ扱いし実験台にしようとするが、ヒロシマ・ナガサキに次ぐ第三の被爆事件で、核兵器実験反対や核廃絶運動が全世界に拡大していく。●さらに放射能汚染が話題となり、日本映画『ゴジラ』が登場するのはこの年の11月のことです。<写真>は54年8月6日、病室でインタビューに答える久保山愛吉さん。



最後のことは、「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」

<3月1日はビキニデー・「第五福竜丸事件」の日>

東京・夢の島の展示館を訪ねてみませんか



▶「第五福竜丸」を被曝させた水爆の「ブラボー」は15メガトン、広島型原爆の1,150倍、当時史上最大の水爆でした。

「第五福竜丸」以外に、のべ800隻の日本漁船、漁民2万人が被曝したと推定されています。同時に被曝したマーシャルの島民も甚大な放射能被害にいまだに苦しんでいます。

また、「第五福竜丸事件」は第3の被爆(被曝)で、日本国民が原子爆弾、水素爆弾の両核爆弾の被爆(被曝)体験を持つことになりました。

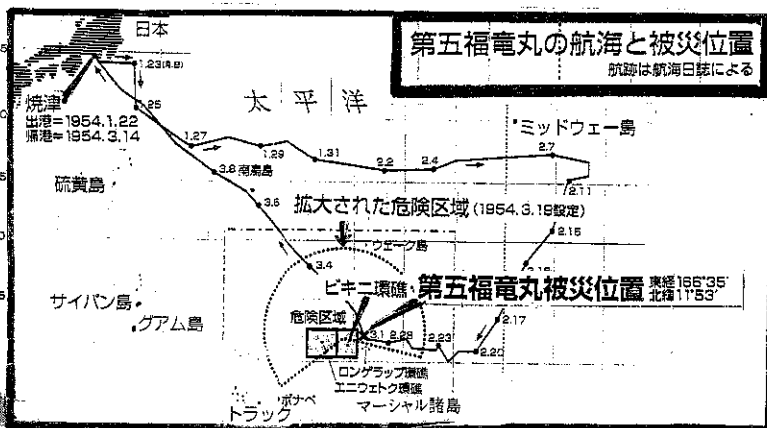


▲マグロ延縄漁船として活躍していた頃の「第五福竜丸」14086ト、全長28.56m。幅1.9m、馬力250、速力5ノット。1947年和歌山県串本町でカツオ漁船「第七事代丸」(ことしるまる)として進水。その後焼津市でマグロ漁船に改造され「第五福竜丸」として操業していました。被曝後に改造され、東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」となる。1967年に老朽化で廃船になり、ゴミとして東京の夢の島に放棄されていたが<右写真>、一通の新聞投書などから保存運動が起き、現在は夢の島の「第五福竜丸展示館」で永久展示されています。



▶「ゴミ」として東京の夢の島に放棄されていた第五福竜丸

この号の写真・地図は、岩波ブックレット「第五福竜丸」より



東京都立「第五福竜丸展示館」

東京都立第五福竜丸展示館
東京都江東区夢の島3-2 夢の島公園内
TEL:03-3521-8494 FAX:03-3521-2900
E-Mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp



第五福竜丸
世界遺産に!!

- JR京葉線、地下鉄・有楽町線、りんかい線「新木場」駅下車、徒歩10分。
- 地下鉄・東西線「東陽町」駅下車、都バス(木11)新木場行きに乗り「夢の島」下車、徒歩3分。
- 車・首都高湾岸線で「新木場」出口より、明治通り沿い1分。

この被曝した第五福竜丸を直接取材した新聞記者が、かつて原町市に長く「朝日新聞原町支局長」として住んでおられ、その取材の様子を次のように語っています。そして、この清野さんも取材の影響か、1985年の夏、ガンで亡くなっています。

新聞記者として「第五福竜丸」を取材

元・朝日新聞原町支局長 清野 肅郎 (故人)

31歳、島田市の朝日新聞の記者でした

「第五福竜丸事件」の時、私は31歳。朝日新聞の静岡県島田市通信局の記者でした。

世紀の大事件であるこの「第五福竜丸事件」について、私に第一報が入ったのは、3月16日の午前3時ごろだったと思います。本社から、「ロイター電で、焼津の漁船が何か光を見てやけどをしたらしいと入電した。すぐに調べよ」と言ってきたのです。その頃ちょうど島田市で少女の誘拐殺人事件があって、私はそちらの取材に追われていたのですが、朝日新聞の島田市通信局員は私ひとりでしたから、すぐにタクシーで、焼津ことびました。東海道1号線はその頃、簡易舗装ぐらいだったかな、松並木なんかそっくり残っていました。

焼津に着いたのは明け方の6、7時頃でした。早速港に行き、第五福竜丸を取材しました。乗組員と話を開いたり、船の写真を撮影したり。「ピカッとした光を見た」とか、「灰のようなものが降ってきた」とか話していて、乗組員なんか元気で、どこもやけどをしている様子なんか感じられませんでしたよ。魚をとる網なんかを片付けていました。

「死の灰」を指でつまんだ



放射能を測定する「ガイガー管」で船の内外部、マングロや魚介類が食べられなく、反核平和運動が日本から世界に拡大していく。

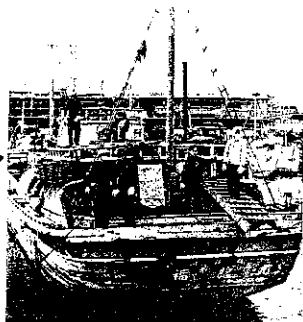
私も甲板に上がり船の中に入ってみたり、白い灰のようなものを直接指でつまんだりしました。今でこそ、それが「死の灰」で、その恐ろしさが分かっていますから、そんなことをするはずはありませんが、その時は、誰も放射能のことなんか知らない。知らないっていうことは本当に恐ろしい。「死の灰」を指でつまんでみると、米粒の半分ぐらいで、塩のかたまりのような、ふわふわしているような白い粒々でしたよ。ほうきでかき集めビンにも入れ、今考えるとヒヤリとします。

読売新聞がスクープ 私は「抜かれた」

昼寝ぶっ壊して各新聞の本社から、ワッサと取材にやってきました。朝日新聞本社からは弓田美喜男記者がその日の夕方応援に来ました。それから一週間ぐらい私はもう寝る時間もなくて取材に明け暮れました。取材と同時に、私は若手の下っ端の記者ですし、地理を知っていたので案内したり、漁協なんかをこまめに走りさせられたり。全く忙しい毎日でした。毎日私に倒れてしまいました。

また、この事件をスクープし、3月16日の朝刊で報道したのが、読売新聞焼津通信局の若い阿部記者でした。彼は大学を卒業したばかりで、焼津の第五福竜丸の持主の家に下宿していたわけです。3月14日に被曝したとわからないまま船が焼津に帰港したのですが、その下宿の高校生の息子さんが、「どうも船の様子がおかしい」とその阿部君に話したことがきっかけになったそう

(1982(昭和57)年11月14日、原町区本町一丁目朝日新聞原町支局で、事務局山崎の聞き取り。相馬双葉地区在住者の被曝体験談集『私も証言するヒロシマ・ナガサキのこと』1983年発行より)



清野記者の撮影か、1954年3月16日付「朝日新聞」の第五福竜丸

です。幸いにも読売新聞では『ついに太陽をとらえた』という原爆の連載を企画していた時で、それを読んで「おかしい」と感じたわけです。

阿部君は早速、二十行足らずの原稿を本社に送り、ピンときたディスクが16日の最終版で報道してスクープになったわけです。知識が豊富で相当の自信がなければ、一面トップで報道するはずありませんから、本社のデスクワークだったとも思えます。

阿部君はたしか静岡県の伊東の僧侶の息子さんで、私は一緒に食事をしたり、お金を貸したりの随分親しい友人でした。この特ダネで彼は菊地寛賞を受賞し、本社勤務になったはずですが、その後黙って伊東に帰るはずですが、

放射能には皆、全く無知でした

この事件でマグロが放射能汚染されたということで回収され廃棄されたりして、日本中が大騒ぎになりました。まるで放射能を伝染病のように考えていて、見当はずれの対策ばかりです。放射能についてアメリカは一切アドバイスはなし。政府もどうして良いか分からなかった。

だから、第五福竜丸の被曝した乗組員への対策だって同じです。初めはちょっとやけどをしたくらいに考えていて、急性放射能症だなんてわからない。藤枝保健所、静岡県衛生研究所へ回され、東大病院で「放射能のせいじゃないか」とようやく入院させる。それだけ当時は無知でした。

私も2・3日後にガイガーカウンターで放射能を測定され、頭髪に反応があらわれて、頭髪を全部剃ったように記憶しています。他の記者でも丸刈りにされたり。船自体もすぐに危険区域ということで立入禁止になりました。

久保山愛吉さんの妻すずさんのこと

9月に死亡した久保山愛吉さんの奥さんのすずさんも、初めは漁師のおっ母さんという感じで、マスコミからの問い合わせにどう答えたら良いのか、など私たちの記者クラブに質問に来たりして、私も文章なんか書いてやったり、一緒に考えてやったりしました。今では人前で堂々とお話などされているようですが、人間も場を踏んでいけば立派になれるんですね。経験が大事なんですね。

九月二五日、遺骨とともに焼津に向かう久保山愛吉さんの家族(東京駅にて)。三人の娘をかかえて妻のすずさん(三三歳)はその後、広島での第一回原水禁世界大会で演説するなど、核兵器廃絶運動に参加します。九三年九月、七二歳で死去。



ともかく、この事件は広島、長崎に次ぐ第三の被曝事件、しかも、平和時における大事件でした。そして被害者は日本人ばかり。私個人としては本当は消滅されたくない、記者としては「抜かれた」大事件なのです。

【死の灰】は、核兵器の爆発や原子炉内の核反応によって大量に発生する放射性生成物の通称。人体に大きな害を及ぼす。【被爆】は、爆弾をうけること。【被曝】は、太陽の光にさらされる意味で、放射線にさらされること。最近では、核実験や原発事故、劣化ウラン弾などの被曝者を広く【ヒパクシャ】の言い方が多く使用される。